

古系譜にみる「オヤーニコ」観と祖先祭祀

——「家」の非血縁原理の原型を求めて——

義江明子

はじめに

- 一 出自系譜以前の「オヤーニコ」
- 二 出自系譜の形成と「オヤーニコ」
- 三 「オヤーニコ」観の変容と祖先祭祀
おわりに

論文要旨

日本の伝統的「家」は、一筋の継承ラインにそう永続性を第一義とし、血縁のつながりを必ずしも重視しない。また、非血縁の従属者も「家の子」として包摂される。こうした「家」の非血縁原理は、古代の氏、及び氏形成の基盤となつた共同体の構成原理にまでその淵源をたどることができる。古代には「祖の子」(Oya no Ko)という非血縁の「オヤーニコ」(Oya-Ko)観念が広く存在し、血縁の親子関係はそれと区別して敢えて「生の子」(Umi no Ko)といわれた。七世紀末までは、両者はそれぞれ異なる類型の系譜に表されている。氏は、本来、「祖の子」の觀念を骨格とする非出自集団である。「祖の子」の「祖」(Oya)は集団の統合の象徴である英雄的首長(始祖)、「子」(Ko)は成員(氏人)を意味し、代々の首長(氏上)は血縁関係と関わりなく前首長の「子」とみなされ、儀礼を通じて靈力(集団を統合する力)を始祖と一体化した前首長から更新し継承した。一方の「生の子」

は、親子関係の連鎖による双方的親族関係を表すだけで、集団の構成原理とはなっていない。

八九世紀以降、氏の出自集団化に伴つて、二つの類型の系譜は次第に一つに重ね合わされ父系の出自系譜が成立していく。しかし、集団の構成員全體が統率者(Oya)のもとに「子」(Ko)として包摂されるというあり方は、氏の中から形成された「家」の構成原理の中にも受け継がれていた。「家の御先祖様」は、生物的血縁関係ではなく家筋觀念にそつて、「家」を起こした初代のみ、あるいは代々の当主夫妻が集合的に祀られ、田の神=山の神とも融合する。その底流には、出自原理以前の、地域(共同体)に根ざした融合的祖靈觀が一貫して生き続けていたのである。現在、家筋觀念の急速な消滅によって、旧来の祖先祭祀は大きく揺らぎはじめている。基層に存在した血縁觀念の希薄さにもう一度目を据え、血縁を超える共同性として再生することによって、「家」の枠組みにとらわれない新たな祖先祭祀のあり方をみえてくるのではないだろうか。